

自主的な地域スポーツ活動に関する実態調査

－震災避難者と地域住民によるグラウンド・ゴルフの事例から－

工藤 実里（筑波大学大学院）

1. 目的

本研究の目的は、震災避難者と避難先の地域住民によって運営されているグラウンド・ゴルフの参加者に対してインタビュー調査と参与観察法を実施し、その実態を明らかにすることで、自主的・自立的な地域スポーツ活動が避難先におけるコミュニティ形成に貢献する可能性について検討することである。

2. 研究方法

- 1) 対象者：東日本大震災の原発事故により茨城県つくば市に避難した後、つくば市N公園で8年間にわたりグラウンド・ゴルフを実施する中・高齢避難者(男性2名・女性4名)とつくば市の地域住民(女性2名)
- 2) 調査方法：インタビュー調査、参与観察法による補足的調査
- 3) 分析方法：修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(Modified Grounded Theory Approach)

3. 結果と考察

分析の結果、13の概念と5のカテゴリーが生成された。概念同士やカテゴリー同士の関係を検討しながら、「震災避難者と地域住民によって実施されているグラウンド・ゴルフ(以下「Nグラウン

ド・ゴルフ」と記す)に対する参加者の認識」を結果図として図1に表した。

Nグラウンド・ゴルフは、{身体活動}と{人との交流}という二つの特性を持つグラウンド・ゴルフを媒介として、避難者と避難先の地域住民とのコミュニティを形成する場になっていた。この場は、対象者にとって{唯一無二の空間}であり、引きこもりの改善や一時的な現実逃避などの{高齢者の変容}をもたらすと同時に、対象者に{生きる活力}を与えている実態が明らかになった。

4. 結論

本研究では、グラウンド・ゴルフで活動を共にすることは、避難者の社会的孤立を防ぎ、避難先でのコミュニティ形成に貢献することや、生きる活力に満ち溢れる充実した避難生活を送るための一方法であることが明らかになり、自主的・自立的な地域スポーツ活動を共にすることがコミュニティ形成に貢献する可能性があることが示唆された。

5. 主な参考文献

- 1) 古屋朝映子, 長谷川聖修(2016): 震災避難者の語りからみる体操教室参加の意味づけ-福島県双葉町から茨城県つくば市への避難者の事例から-, 筑波大学体育系紀要, 29(2): 139-148

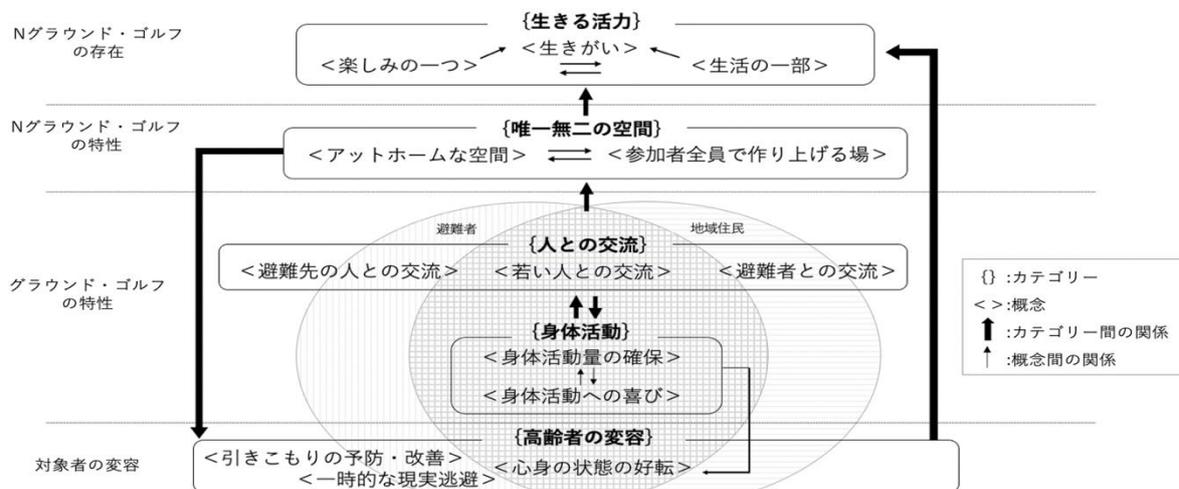


図1 震災避難者と地域住民によって実施されているグラウンド・ゴルフに対する参加者の認識